

巻 頭 言

学校長 鈴木 由美子

「中等教育研究紀要」は、本年で第68号となった。『創立百年史』によると、1920（大正9）年に本校に中等教育研究会が創設され、第1回中等教育研究会が開催された（当時は附属中学校）。全国の中等教育をリードしようとする本校教員の情熱と使命感のもと、1932（昭和7）年に、本紀要の前身ともいえる『中等教育の実際』が創刊された。このような名称にした理由について、『創立百年史』には、次のように述べられている。「この機関誌の誌名に、敢えて『実際』という語を用いたのは、根本の問題のほかに、手近な研究も見逃さないという立場を表明するためであり、会員の平素の実践や調査研究を発表して、中等教育界に貢献しようとしたのである」（『創立百年史』416頁）。こうした伝統は、今でも継承されている。

近年、高大連携・接続が推進されており、本校でもこれまで授業等で、大学との連携を進めてきている。その一つとして、広島大学では2020（令和2）年度から「広島大学アドバンストプレイスメント」を導入した。これは、高校生が科目等履修生として、広島大学の学部生を対象とする授業を受講して試験等を受け合格した場合、単位を授与されるという制度である。この制度では、単位を授与された生徒が広島大学に入学した際には、広島大学の単位として認定される。「広島大学アドバンストプレイスメント細則」によれば、「アドバンストプレイスメントは、高等学校等に在学する生徒に対して、本学の学部生を対象に開設する授業科目の履修機会を提供し大学教育に対する理解を深めるとともに、生徒自らの学習意欲を喚起し高等学校等における教育の一層の向上を図ることを目的とする。」（第2条）とある。本校でも希望する生徒たちが受講し、知的好奇心を大いに刺激されたようである。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）において、2022（令和4）年度より「総合的な探究の時間」が実施されるが、この授業では生徒自身が課題をもち、その課題解決のために探究を行うことになる。生徒の指導を行う教師の研究指導力の向上が今後の課題となってくるだろう。教師が自らの研究力を向上することも、研究指導力を向上させるために重要なことである。教師には、教科書にある知識を教えるのではなく、知識の奥にある学問の面白さ、自然現象や社会現象の不思議さや謎に気づかせ、探究への欲求を駆り立てることが求められる。そのためには、教師自身が、知的探究者であることが必要であろう。日々の教育実践や教育研究を地道に行い、世に問いながら、さらに教員としての力量を高めていくその姿勢が、生徒の研究指導につながっていくのである。

本紀要に収録した論文は、教育実践研究を通して得た新たな知見や提案が示されている。学習指導要領改訂の先を見据え、予測不能といわれる30年後の社会に生きる生徒にとって必要な資質・能力とは何か、深く考察しながら教育実践研究を積み重ねているのである。ここには中等教育の発展に貢献しようとする、本校の役割や使命が見られ、脈々と継承される伝統の強みを感じるところである。

本年度も、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大防止のため、様々な制約のあった1年であったが、このような状況の中でも、本校教員はたゆまず教育実践・研究を行ってきた。その成果をどうかご高覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸甚である。

本紀要の刊行にあたっては、担当の教員にご尽力いただいた。感謝申し上げたい。また業務多忙の中、論文を執筆していただいた本校教員にも感謝申し上げたい。本紀要が、中等教育の発展に貢献することを心より願っている。

